千葉大学
広報誌

No.11
2010 MAY

CHIBADAI Press

一歩踏み出す勇気で未来をつかめ！

千葉大学教育学部教授（身体・スポーツ教育講座） 吉岡伸彦（よしおか のぶひこ）

バンクーバーオリンピックの銀・銅メダル、そして続くトリノの世界選手権では男女とも優勝し、ジュニアと合わせて、世界のシングルの金メダル４つを独占するなど、大きな活躍を続けているフィギュアスケート界。実は、その強化部長が千葉大学の教授だということを知っていましたか？

今回は、大学教授として教育・研究を続けるかたわら、代表選手を陰に日向に支える吉岡伸彦先生にお話を伺いました。

――まずは吉岡先生とフィギュアの出会い、千葉大学との出会いから教えてください。

僕は小さい頃から身体が弱く、身体を鍛えるために地元船橋の船橋ヘルスセンターというところでスケートを習っていました。そして、中学生の時にフィギュアスケートの先生に指導を受けたのをきっかけに、フィギュアスケートの道に入りました。今でもそうですが、当時のフィギュアスケートはあまり競技人口は多くなく、インターハイやインカレなどで入賞することはできましたが、選手としては「そこそこ」だったかと思います。それで、1年浪人して東京大学に入学。「もっとラクして上手になる方法はないかな」という思いから、現在も研究を続けているバイオメカニクスを専攻することとなりました。結論としては、「ラクして上手に」はなれなかったですけどね（笑）

バイオメカニクスとは、簡単にいうと身体の構造や動きを力学的に研究することです。ケガが起きにくい、効率のよいトレーニング方法の探求や、スポーツ用具―例えばスケートのブレード（刃）などの改善にもつながります。この研究をしながらスケート連盟のお手伝いをするようになり、そして大学院博士課程の時に千葉大学からお誘いを受けて、今に至るというわけです。

――今回のオリンピックも、選手に同行されてカナダに行ったんですね。もしよろしければ、裏話などをお聞きしたいのですが。

一歩踏み出して、栄光と成功をつかもう！

そんなに期待するほどのことはありませんよ（笑）。選手も学生と同じ世代の子どもたち、普通の若者です。小さい頃からフィギュアばかりをやっているから、むしろちょっと子どもっぽいかな、という印象ですね。ただ、**集中力やここぞという時の気持ちの強さ**というものは、一般の学生にはない凄みを感じます。そこが差かな。オリンピック村では、選手に二人部屋が割り当てられているのですが、試合が終わるまではそれぞれライバル同士。試合前は一人にさせてあげたいと、我々スタッフは自分のベッドを移動させ、定員オーバーの部屋で眠るなど、選手の時間と空間を確保することに務めました。

現地での僕の大きな仕事は、試合中、取材をシャットアウトしたい選手の状況をマスコミの方に伝えることでした。でも、マスコミの方は、既にストーリーを持って取材に来るので、こちらの意図がストレートに伝わらないもどかしさはあります。たとえば、高橋君の4回転は現地に入る前から「よほど調子が悪くない限りやる」と決めていた。でも、報道は「迷っている」「現地で決めた」などさまざま。ドラマティックにしたいのでしょうね。報道は書き手の意図が入っているものだということ、もっと皆さんにも知ってほしいなと思います。

――高橋選手の4回転挑戦も、浅田選手の三度のトリプルアクセル挑戦も本当に感激しました。

もともと、日本はジャンプを重視していますが、それは、伊藤みどりさんのアルベールビルオリンピックの演技がきっかけです。あのとき、伊藤さんはオリジナルプログラムでトリプルアクセルを回避したにも関わらず、ジャンプを失敗。その後、フリープログラムで挑戦し、オリンピックでの女子初のトリプルアクセルに成功したんです。逃げた失敗と挑戦した成功、この2つのジャンプから「選手がやる気なら挑戦するべきだ」、というのが日本の大きな方針になりました。今回の五輪では「いかにルールに適合したプログラムにするか」が焦点になりがちでしたが、日本としては、それも受け入れつつ、これまで他を圧倒して来た高い技術力を活かし、そして**より難しいものに挑戦していきたいというアスリート本来の考え**、選手の心を重視して臨みました。

――それにしても、吉岡先生が強化部長になられてからのフィギュアスケート陣の活躍はめざましいですね。

いえいえ、たまたま現在、僕が強化部長になっているだけです。実は、98年の長野オリンピックに向け、日本スケート連盟フィギュア部は92年頃から強化を続けています。けれども、人を育てるというのは、そんなにすぐに実がなるものではありません。**地道に、少しずつ続けてきたことが18年経ってようやく今、花開きつつある**というところだと思います。

――では、吉岡先生の千葉大学でのご活躍についても教えてください。

研究室には修士1名、4年生4名、3年生4名がいて、そのうち2名が女性です。指導教授としての僕は非常に厳しいと思います。自分で何かをやろう、研究してつかみ取ろうと思っていない学生は、意味がないと思っていますから。だって、大学ってそういう所でしょう？誰かに教えてもらおうというのは高校で終わり。だから卒論や研究の題材探しもすべて学生自身に委ねています。**自ら自分のするべきことを作るタイプの人**じゃないとちょっとツライかなぁ。

――そんな厳しい吉岡先生から見た、千葉大学のイメージは？

これも厳しいことを言うようですが、20数年経って、だいぶ学生がおとなしくなってしまったな、という印象があります。たとえば、教科書や本に書いてあることを疑うことをあまりしない。先ほどの報道のお話にもつながることですが、教科書にも本にも書き手の意思や意図が込められています。それなのに、書いてあることをすべて素直に受け入れちゃうと、学問が発展しないんですよね。**まずは書いてあるものを疑え、常識を疑え**、と言いたい（笑）。

学生のタイプとしては、非常に優秀で秀才が多いイメージです。バランスがよく調整役に向いている人が多いですね。個人的にはもっと殻を破るような行動をしても良いんじゃないのかな、と思います。千葉大学のモットーは「日本のリーダーを作る」ですが、リーダーになるには、人が作った道を歩んでいるだけではいけない。**道なき所に道を作っていく力強さ**が必要だと思います。その力強さがなければ、小さくまとまってしまい、発展することはできないでしょうね。

――最後に、千葉大学の学生にメッセージをお願いします。

学生時代を送っている君たちに言いたいことは**「安定しているところから、一歩踏み出してみないか？」**ということです。踏み出すというのは、意識もそうだし、行動もそう。とりあえず、今の自分がいる心地よい場所から離れてみる。たぶん、それは不安であり、怖いことだと思います。けれども、守られた場所から踏み出さない人には成長も発展もないのです。

オリンピック選手は、皆、自分が今現在できること以上のことを求め、より高いものを目指して、一歩踏み出し、挑戦しています。そして、**挑戦した人こそが、栄光と成功をつかんでいます。**同世代の学生諸君も、ぜひ、今の自分から一歩踏み出し、さらなる大きな自分をつかんで欲しいと思います。

バンクーバーオリンピック選手村にて

千葉大学の国際交流

国際化推進・国際戦略担当副理事
安藤 昭一 教授

このたび、千葉大学の国際交流を紹介する機会を頂戴しました。紙数の都合上、全てを言い尽くすことは困難ですが、国際化にかかる推進体制、現状及び今後の課題などについて簡単に紹介いたします。

◆国際化推進体制の強化

まずは、本学の国際化推進に関する体制を紹介しましょう。

千葉大学では大学の国際化を全学的かつ包括的に推進するため、昨年10月に学長を本部長とする国際戦略本部を立ち上げました。同本部には、その内部組織として国際展開企画室と留学生戦略企画室が配置され、これにより国際化に関する意思決定と企画を一体的に進める体制が整いました。

◆国際交流の現状

千葉大学の国際化に関して、幾つかのデータを基にその現状を紹介しましょう。最初に留学生の受入数です。2004年度の772人に対して2010年度は1068人と約38％の増となっており、かつ右肩上がりに推移しています。しかし、約90％がアジアからの留学生であり、地域間のバランスに改善の余地があると考えます。

次に、交流協定の締結本数(*)です。2004年度の118本に対し、2009年度には260本と2倍以上に急増しています。教育研究の交流機会の拡大の観点から歓迎すべき傾向と言えるでしょう。

続いて、交流協定にも関連するデータとして研究者の派遣・受入状況を紹介します。2008年度実績は2004年度のそれと比較してそれぞれ20％、15％の増となっており、協定増による効果とも見ることができますが、一方で、双方の数の比較をすると派遣の1226人に対して、受け入れは383人と約3分の1にとどまっています。研究大学を目指す千葉大学にとってこの差が何を意味するのか気になるところです。

少々乱暴なまとめとなりますが、千葉大学の国際化は規模拡大の傾向にあるが、今後はその内容の検証を踏まえた質の向上を図る時期にも来ているのではないでしょうか。

(*)大学間・部局間の学術交流協定及び学生交流協定の本数

◆今後の方針、取り組み

国際化の推進は千葉大学としての最も重要な取り組みの一つです。それだけに今後の課題は山積していますが、これは昨年度スタートしたグローバル30プログラム（G30）への申請の際に策定した国際化プラン及びその取り組みが基礎になるでしょう。G30は残念ながら本学は不採択となってしまいましたが、採否の結果に係らず国際化を推進するとの学長のリーダーシップの下、英語による教育プログラムの導入、ワンストップサービス、海外拠点（詳細は本号「海外拠点」の章を参照）などの取り組みを鋭意進めてきました。これらの取り組みは今後も戦略的に進めなければなりません。

またこのほかに海外との交流に関しては、1対1の交流はその効果の検証を踏まえ、推進しつつ、より効率的な交流としてコンソーシアム形式の交流も積極的に考えていくべきでしょう。

◆最後に

千葉大学を世界に開かれた教育研究の拠点へと発展させるに、戦略的な国際化の推進が必要不可欠な要素です。また、そのために取り組むべき課題は山積しています。私は国際戦略本部のメンバーとして、また教育研究現場の一員として、微力ですが、千葉大学の発展のために邁進していきたいと思っています。

このように国際展開が出来ればと思っています

外国人教員の紹介

文学部国際言語文化学科
WUNDT STEFAN
（ヴント シュテファン）教授
出身国：ドイツ連邦共和国

ドイツ語とドイツ文化論を教えています。独日両文化の違いと共通点、また、いかに日本語をいいドイツ語にするかを研究しています。

以前は弘前大学で勤務していましたが、学会で会った千葉大学の先生と一緒に飲んだことがきっかけで千葉大学に採用されました（当時、日本人はお酒を飲める人はいい人だと思っていたようです）。今年で勤続30年になります。勤務当初の千葉大学の校舎はかなり古く、学生も真面目だが田舎臭い印象でした。現在、大学の校舎は新しくなり、学生もとてもファッショナブルになりましたが、学生が真面目である点は変わっていません。真面目で優しい学生たちに対して、いつも楽しく教えています。

日本に来た当初、弘前大学の上司が私を他の先生に紹介するために、各研究室を回りました。そこで会った先生は皆同じ暗い背広を着、黒ぶちの眼鏡をかけており「日本人の男は皆同じに見えるものかと」驚いたことを覚えています。最近は広告宣伝を読んで驚くことがあります。例えば、スポーツジムで見た某ビールの広告では短い宣伝文の後に、それよりはるかに長い注意文が続きます。“運動後の飲酒はしないで下さい”“飲酒は20歳になってから”“飲酒運転は法律で禁止されています”など、実に押しつけがましく感じます。私はこれを見た時、そのビールを飲む気が失せました。日本人は注意されるのが好きなのでしょうか？

環境リモートセンシング研究センター
Josaphat Tetuko Sri Sumantyo
（ヨサファット テトォコ スリ スマンティヨ）准教授
出身国：インドネシア共和国

地表層における様々な情報を精密かつ高精度に観測できる円偏波合成開口レーダ搭載の小型衛星（μSAT CP-SAR）を開発しています。

2005年に准教授として採用になり、環境リモートセンシング研究センターで円偏波合成開口レーダ（CP-SAR）搭載小型衛星と無人航空機の開発をして、5年後に打上げる予定です。この千葉大発の小型衛星は地球表層における円偏波散乱の解明、インタフェロメトリ(CP-InSAR)、軸比画像の生成などの基礎研究と、災害監視、雪氷監視、海洋監視などの応用研究に従事します。

千葉大学の第一印象は「国際的な教育と研究活動が活発」というものです。世界的な研究教育機関である環境リモートセンシング研究センターに配属になってさらにそれを実感しました。

1990年にインドネシア政府派遣留学生として来日したとき、飛行機の窓からきれいに並んだ田んぼを見て一番驚きました。「生まれ故郷と同じだ！」と心の中で叫び、この国でも色々なことに貢献できると思いました。

千葉大学は協定大学との国際交流を進めています。海外から留学生がたくさん千葉大学に勉学と研究に来ているので、千葉大学の学生諸君も海外の協定大学に留学して色々なことを勉強してほしい。きっと人生の役に立つことが多く身につくと思います。

大学院工学研究科
兪 文偉（ユ ブンイ）教授
出身国：中華人民共和国

リハビリテーション、医療を補助するロボット技術の研究開発をしています。

1994年3月に研究生として来日したときに、周りの学生の学問探求の本気さに感心しました。夜中に廊下の壁に寄りかかり、研究について長時間議論している姿を見て、努力家と自負している自分は驚きを隠せませんでした。しかし、残念なことに、最近の10年の間、そのような本気さがだんだん見られなくなりました。

2004年4月1日、当時では、全国初の医工学学部教育組織：工学部メディカルシステム工学科に赴任してきました。6年間の講義や研究で触れ合っていた学生は、十分な基礎能力を持ち、素直でまじめな人が多いですが、「あと一歩」のところで、止まってしまう人も少なくありません。本気さと自信が足りないことが要因かと思います。

千葉大学は、総合大学の力を発揮し、そのような学生を本気にさせ、また、彼らに自信がつくように、いい経験がいっぱいできる場になり、さらに一歩前に進んでほしいと常に願っています。私も自分の専門分野で積極的にいい研究を進め、大学のさらなる一歩に貢献していきたいと思います。

千葉大学海外拠点

千葉大学は、平成19年度に北京に設置した中国オフィスに続き、タイのマヒドン大学に海外拠点International Exchange Center(IEC)を設置しました。

このIECプロジェクトは、千葉大学の教育研究のグローバル化を国際展開、留学生戦略の観点から更に推進すめるため構想されたもので、国際戦略本部の下、平成21年度からスタートしました。千葉大学との間で活発な教育研究交流を実施している姉妹校との間でIECのオフィスを相互に設置することを基本のコンセプトとしています。オフィススペースは双方の教職員による現地での活動のベースとして活用していただくとともに教育研究に関する情報交流のインフラとしても機能させることとしています。今回IECを設置したマヒドン大学とは園芸学分野、薬学分野を中心に10年以上にわたる交流の歴史を有し、姉妹校の中でも、最も活発に交流を進めている大学の一つであり、IECを通じて更なる交流の発展が期待されています。また今後は、インドネシア大学(インドネシア)、セイナヨキ応用科学大学（フィンランド）にも同様にIECを設置することを計画しています。

一方、千葉大学では国際展開のプロジェクトとして千葉大学の同窓会組織である海外校友会の結成も推進しています。そこで、IECプロジェクトではその活動をIEC設置校との関係に閉じるのではなく、海外校友会の同窓生リソースや海外校友会間のネットワークを活用することにより、その国更には地域での活動へと広げ、より多角的かつ広範に海外展開を図ることとしていますので、教職員の皆様には是非このIECを有効に活用していただければ幸いです。

本年3月にタイ・マヒドン大学で開催されたIECオフィスの開所式

国際教育センター

留学生担当副理事、国際教育センター長
新倉 涼子教授

◆千葉大学の留学生

千葉大学には現在、世界51ヵ国1068名（平成22年5月1日現在）の留学生が在籍しています。日本全国では文系の留学生が過半数を超えていますが、千葉大学では理系の学生が、特に大学院生の数が多いのが特徴です。また、全世界の協定大学からの短期交換留学生も増えており、彼らの留学形態、留学の動機は多様化しています。世界51ヵ国の留学生が集まる中、彼らの文化的背景、生活習慣もさまざまであり、千葉大学はまさに世界の縮図といってもいいでしょう。留学生の動向からさまざまな世界情勢がみえてきます。

◆国際教育センターのミッション

千葉大学国際教育センターは、全学的な国際化推進の流れの中で、千葉大学の留学生教育の拠点としての役割を果たすべく設置されました。

国際教育センターは、留学生が日本という異文化への感受性や異文化対処能力を高めながら、心理的に安定し、所期の目的を達成できるよう、日本語・日本事情教育をはじめさまざまな側面からの教育プログラムを展開しています。

また、日本人学生に対しても、学内での留学生との協同活動を行う混在学習の機会を提供するだけでなく、海外の大学にある教育リソースを最大限に利用し、世界の国々への留学を促すための取り組みも行っています。

◆留学生教育の意義

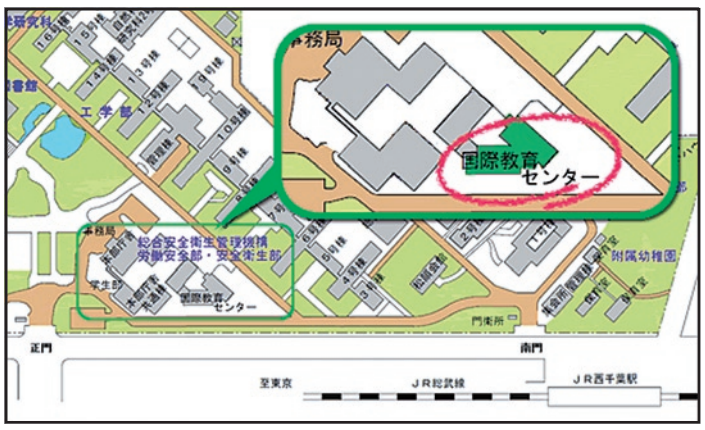
留学生教育の意義は、日本人学生、留学生を問わず、双方が相互交流を通してともに複眼的、相対的思考力を高め、国際社会の中での問題解決能力を高めることにあります。大学教育の質の高さを維持し、留学生、日本人学生がともに学ぶ中で、留学生も日本人学生もともに客観的に自己を見つめ、新しい関係の中での生き方を学び、共生への実現に積極的に参与する力が育ちます。

異なる文化や教育体験を持った留学生の存在は、日本人学生にとっては自分と異なる文化への「気づき」を深化させ、世界への窓を開く契機となります。また、留学生にとっても日本人学生にとっても、言語や行動様式、価値観の違いに直面し、相互に調整しながら諸問題を超えて共通の課題を達成したとき、双方に深い信頼感が生まれます。

この相互信頼関係を大切にし、千葉大学の知的、人的ネットワークを構築していくことにより、千葉大学が真の意味での学問のCenter of Excellenceとなりうるのだと思います。

◆おわりに

世界は国際情勢の激変や危機に立つ地球環境など、大きな転換期にさしかかっています。国際教育センターは、「留学生教育」の理念と目的を喚起しながら、日本人学生、留学生を問わず、国や文化を超えて通用する専門的能力を身につけた人材の育成を目指し、施策の立案と大学への積極的な提言を行う組織としてもその役割を果たしたいと思っています。



千葉大学国際教育センター

センターにおける活動の様子

● 日本語・日本文化授業 ●

学習、研究に必要な日本語や日本事情等様々な側面からの教育プログラムを展開しています

● 海外留学指導 ●

海外学生交流支援室にて留学ガイダンス／留学相談を行っています

● 留学生の研究発表会 ●

日本人学生を交えてお互いの研究を発表しています

● 派遣留学生帰国座談会 ●

派遣留学を終えて帰国した学生が留学体験を語ってくれます

国別留学生数

※平成21年11月1日現在

部局別留学生数

学部等	人数	学部等	人数
文学部	52	園芸学研究科	101
教育学部	46	人文社会科学研究科	77
法経学部	80	融合科学研究科	55
理学部	24	医学薬学府（医）	40
医学部	3	医学薬学府（薬）	23
薬学部	7	社会文化科学研究科	8
看護学部	7	自然科学研究科	36
工学部	216	総合メディア基盤センター	1
園芸学部	21	国際教育センター	12
教育学研究科	13	言語教育センター	2
理学研究科	56	フロンティアメディカル工学研究開発センター	1
看護学研究科	3	環境リモートセンシング研究センター	15
工学研究科	173	環境健康フィールド科学センター	1

TOPICS

自転車マナーの向上

西千葉キャンパスにおける改善の取組

キャンパス整備企画室　教授　上野　武

優秀賞【マナー改善部門】
奥田 萌 さん
（工学部建築学科２年）

優秀賞【ステッカー部門】
辻 麻里絵 さん
（工学研究科建築・都市科学専攻修士１年）

学長賞【放置自転車部門】
長野 楓 さん
（工学研究科デザイン科学専攻修士1年）

公募によって選ばれた自転車マナー啓発ポスター　※2010年1月現在

千葉大学は、安全・安心で、全ての人に優しいキャンパスを実現することを目標としています。自転車利用についても同様で、利用者に年間500円で駐輪ステッカーを購入してもらい、その資金も使って整理員確保と駐輪場整備を進めています。そのため、自転車利用者はすべてステッカーを購入・貼付してもらうことになっています。

しかし、いまだにステッカーが貼られていない自転車が多く、さらに、南門周辺では放置自転車や駐輪枠内をはみ出すなどの違法駐輪が多く見られます。また、JR西千葉駅前、京成みどり台駅前では、千葉大関係者の違法駐輪が目立ち、多くの苦情がよせられています。

通学だけではなく、学内移動だけに自転車を利用する人が多いことも、学内に自転車が溢れる原因になっています。広いキャンパスを休み時間中に移動しなくてはならず、やむを得ず自転車を利用する人以外は、より省資源につながる歩くことを推奨したいと思います。

千葉大学行動規範には、「私たちは、教育・研究、地域社会への貢献を円滑に行うために、安全かつ快適な職場環境の整備に努め、自身の成長と健康維持に努めます。」とあります。この精神を大切にするためには、一方的に管理を強化するのではなく、利用者自らがマナーを改善していく必要があります。そのために昨年度は、学生・教職員合同の自転車利用マナー改善WGをつくり、マナー向上のための具体策を実行しました。

整理員の方が乱雑に停められた自転車を毎日整頓しています

啓発ポスターの学内公募と、シンポジウムの開催です。ポスター公募には、3つのテーマ（放置自転車、ステッカー貼付、マナー改善）に対して多くの提案が寄せられ、優秀作品を作成した学生に齋藤学長から表彰状と金一封が贈呈されました。現在は3作品が学内に掲示されています。シンポジウムでは、整理員の方や千葉市自転車対策課にも参加いただき、千葉大構内の自転車環境に加えて、西千葉駅前の現状についても写真や数値等が紹介され、活発な議論が行われました。

その成果をもとに今年度は、駐輪ステッカーの100％貼付の実現を目指しています。皆さんのご協力をお願いします。

2009年度 ステッカー発行台数	4,793台
学内の駐輪台数の最大値	約6,600台
学年末に放置される自転車台数	約1,400台

数値で見る西千葉キャンパス駐輪状況

COMMENT
OB・OGが語る千葉大学

大学院　修了式にて

和泉　成子さん（ワシントン州立大学）

看護学部の10期生として1988年に卒業しました。現在は米国ワシントン州にあるWashington State University, College of Nursingで助教授として勤めています。大学院での研究教育と医療看護倫理と終末期医療に関する研究を主に行っています。

看護学部を卒業後、看護師として勤務し、その後ワシントンDCの大学に語学留学、そして米国の看護学部大学院に入学しました。私が日本で働いていた1990年前後の当時はまだ多くのがん患者が痛みに苦しみながら病院で亡くなっていた時代です。そのような患者さんを看護した体験から終末期医療に関心を持ち、大学院卒業後、短期間ホスピスで働き帰国しました。1998年に再度渡米Oregon Health & Science Universityの博士課程に進学しました。博士論文は「終末期ケアにおける看護倫理」で、よい看護/医療の実践のために必要な専門職者としての倫理についての研究を進めました。博士課程修了後に帰国し、日本の大学に就職しましたが、アメリカ人の夫の仕事の都合で、再び渡米。ポスドクを得て研究を続け、現在の大学に就職しました。国際学会等に参加する機会も増え、ヨーロッパ・アジアの研究者たちと共同研究する機会にも恵まれました。

大学時代はバブルの時代で、大学生が個人で海外旅行に行くことが可能になったころです。私も２年生のときに、千葉大学の姉妹校であるアラバマ大学への夏期短期留学に参加しました。テニスの写真はその時のものです。南部訛りの英語もそれとは知らずに「英語の聞き取りは難しいなあ」と嘆きながら、本当に「よく遊び、よく学ぶ」アメリカ人の同年代の学生に関心することしきりの留学でした。その時の体験から、語学を修得してもっといろいろな国の人たちと交流したいと思いました。専門課程に進み亥鼻キャンパスへ移ってからは、医療英語を勉強するMESSAというサークルに参加しました。このときの仲間は海外で活躍している人が多いと聞いています。

他国に住み、いろいろな文化の人々と交流する度に思うことは、語学力と相手を知ろうとする気持ちの大切さです。アメリカではラテン系移民の人口が増え、スペイン語の話せる医療職者が求められています。そのうちスペイン語も話せるようになりたいと密かに思っています。海外で生活をしていると、自分の文化を振り返る機会が多くあります。日本で生まれ育った中で身についた自分の価値観を知り、相手がどのような背景と価値観をもって今自分の目の前にいるのかを思いながら人々と接することで、自分が世界の一員であることを感じる今日この頃です。

大学２年生　アラバマ大学にて

CHIBADAI SUPPORTER

（財）母と学生の会　大野恵美子さん

習字に挑戦

母と学生の会千葉支部は1965年５月に創立されました。千葉大学関係のご婦人方、キリスト教関係の方が立ち上げました。当時は戦後日本が東南アジアに支払うべき賠償の一部を先方の国々が留学生を受け入れてもらいたいということで、それぞれのお国の高校卒の若い優秀な学生が学部に入ってきました。勉学に勤しむ将来ある学生さん方に少しでも不自由や心の寂しさを癒すことができればと活動を始めました。彼らの衣服の繕い、話し合い、パーティ、食事のサービス、旧留学生寮の玄関前でゴザを敷き七輪に炭をおこし、ジンギスカン鍋を囲んでよく食べ語らい喜ばれたことは今でも懐しい思い出です。

その後時代の発展と共にニーズも少しずつ変わりましたが、南方の方々に冬の衣服の提供、自炊をする方への茶碗小鉢、時には寮を出る方への家具、フトン類の提供をもしました。今日では日本の美しい着物が大変喜ばれ、会として二十着分のお振袖、卒業式の袴、男性の羽織袴を所持し、会員が着付をしております。

この他日本文化紹介としてお茶、習字、結婚衣裳の紹介等や、日本語を学ぶ機会のない配偶者に日本語を教えています。

私共の活動を理解応援して下さる方がおり、あるお寺様は年300～400キロの寄進米を会に下さり、それを小分けして留学生に配っております。又「私は出来ないけど自分のお金を生して使ってもらいたい。」という篤志家から多額のご寄付をいただき、会の活動を支えていただいております。

晴れ着姿で

大学側の施設のご提供、上記の方々のご援助、会員のパワー、三者一体となって留学生の方々が少しでも日本、日本人を理解して帰ってくれればという思いで活動している会です。

CHIBADAI Press アンケート

読者の皆様のご意見を今後の企画・編集に活かし、充実した内容でお届けするためアンケートにご協力をお願いします。
https://chibadaipress.kappe.jp/　（PC、携帯共通）

編集・発行　千葉大学　企画総務部総務課　〒263-8522　千葉市稲毛区弥生町１番33号　TEL　043-251-1111（代表）　http://www.chiba-u.ac.jp　bag2018@office.chiba-u.jp　● Chiba University